

キックオフシンポジウムを開催

5月16日(火)、3大学が進める「ひとや地域（まち、文化・教育）のwell-being に貢献するDX人材の育成」を多くの人々に知っていただくため、新山口駅直結のKDDI維新ホールにおいてキックオフシンポジウムを開催しました。

SPARC事業の説明及び概要・取り組みの報告に続いて、株式会社国際社会経済研究所の西岡満代氏、Quantum Analytics合同会社CEOでデータサイエンティストの古屋俊和氏が基調講演を行いました。

西岡氏は、「**社会が求める文系DX人材とともにパーパス都市経営で実現するWell-Being の高いまち**」をテーマに、ご自身が携わっているスマートシティの取組を紹介。地方における人口減少に伴う働き手や税収の減少、自然災害の多発など地域が直面する課題を解決し、明るい未来に転換するためには、デジタルの力を利用することが有効であり、これを進めるに当たっては技術だけでなく、文系的な要素も必要である、との考えを示しました。具体的な事例として、富山市が取り組んだ中心市街地への集中投資や高松市のデータを活用した交通安全対策などを紹介し、地域らしい街の実現に向けて、データを“仲間”として使う必要性を説きました。



オンラインで参加した古屋氏は、「**未来を拓く！ChatGPTと文系DX人材が地域活性化に革新をもたらす**」をテーマに、ご自身が開発に携わったブタポット（仏教対話AI）が新しいモノ（AI）と古いモノ（仏教）の組み合わせであることを説明。こうした新しい発想は文系DX人材にしかできないことを示しました。さらに、最近さまざまな場面で取り上げられている“Chat GPT”について、これからGPTが創り出せそうな事例-小説等の文字情報を元とした映画製作など-を紹介しました。今後求められるDX人材像としては、技術難易度は低下するが応用領域が広がると予想されることから、どういった領域でDXを使えるのかを考える文系DX人材が重要であるとの考えを示しました。

本学の卒業生、在学生在がパネルディスカッションに登壇

基調講演に続いて、各大学の卒業生と在学生在、教員による文系DX人材の意味付けや社会で期待される活躍、在学中に身につけておく力について意見を交換するパネルディスカッションを開催しました。冒頭、国際文化学科の阿部准教授から文系DX人材とは何かを簡単に説明を行い、関係者9名によるディスカッションに移りました。

本学からは、**2021年3月に国際文化学科を卒業し、現在（株）弘法に勤務している井上沙織さんと、国際文化学科4年生の内藤海さん**がパネリストとして登壇しました。

井上さんは、大学在籍中はDXとは無縁だったが、社会に出てからDXと関わりを持つようになったと断った上で、現在ドキュメントソリューションに携わり、学校にDX化を提案していることを説明しました。学校へのOA機器の販売に関してITC化やDX化の手ごたえを感じており、具体的な事例として、出欠連絡アプリ、ベルマーク運動のオンライン化などは、発想の時点で文系が持つ力を発揮できるところであり、カスタマーの不安に寄り添うためには理系が得意とするデジタルツールと文系が得意とする提案力が必要と結論づけました。さらに、これから社会人になる学生に対して、興味や関心を持ってアンテナを360度張り巡らすようエールを送りました。

内藤さんは、卒業生が語った仕事上でのDXとの関わりを聞いたことにより、今回、最新の技術を改めて知った、と断った上で、これから育つであろうDX人材を雇用する側の意識もキーポイントとなるのではないかと質問を投げかけました。企業の上層部には上の世代が多く、この人たちが意思決定をする際に、本当に変革に対応できるのかといった疑問でした。これに対して、基調講演を行った古屋氏は、企業のDX化はそれが企業にとって必要かどうかであり、必要なければなくてもいい。DX化しないと潰れるところは危機感があり、その必要性を社長は感じている、と回答しました。

なお、このシンポジウムの模様は、SPARC事業を紹介したコンソーシアムの専用ウェブサイトで近日公開する予定です。

<https://www.yamaguchi-sparc.jp/>



2021年卒業の井上沙織さん



国際文化学科4年の内藤海さん

コンソーシアムの委員会紹介 ～連携教育プログラム委員会

コンソーシアムには、SPARC事業の円滑な推進のため、現在「企画運営委員会」と「連携教育プログラム委員会」の2つの委員会を設置しています。

今回のニューズレターでは、連携開設科目を活用した教育プログラムやリカレント教育、高大接続、教育プログラムの質保証に係る点検・評価などを所管する「連携教育プログラム委員会」について紹介します。

委員会の座長は山口大学の葛特命理事・副学長が務め、本学からは岩野副学長、吉村副学長ほか4名の教職員が委員として参画しています。

委員会には、連携開設科目、LMS構築、教学IR、高大接続に関する4つのタスクフォースチームとPBLの実施部会が既に設置され、来年度にはリカレント教育に関するチームが設置される予定です。

次回以降のニューズレターでは、タスクフォースチームや委員会で決定された事項について随時報告いたします。



前号、前々号に続き、室員を紹介します

SPARC推進室 室員紹介④

佐藤 和孝(さとう かずたか) 特任教員 (講師)



皆様、はじめまして。2023年の4月より、SPARC推進室の特任教員（兼務DX・IR推進室）となりました。担当はIRで、主にデータ処理や集計業務を行っています。専門は医療情報学で、データベース構築やプログラミング技術を生かし、業務負荷軽減のためのシステム開発やシステム運用改善による業務効率化等を経験してきました。本大学では、みね健康百寿プロジェクトや山口県国民健康保険データ解析等の業務にも関わっています。私の経験を活かしてSPARC推進室に貢献できればと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

SPARC推進室 室員紹介⑤

池田 祥人(いけだ よしと) 地域連携事業コーディネーター

はじめまして。2023年4月1日付で着任しました、SPARC推進室地域連携事業コーディネーターの池田祥人です。

肩書は何やら重々しいですが、具体的には学生さんの教育支援に熱心な企業との接点を強化して、本学との連携を図ることがミッションです。SPARC事業では、主にDXによる課題解決(PBL)のお手伝いをさせていただきます。

これまで金融業、製造業、サービス業の企業に勤務していました。企業での経験を活かして、少しでも本学のお役に立てればと思っています。よろしくお願いいたします。



編集後記

連携開設科目の試行（国際文化実践論/地域学）が始まり1か月が経過しました。本学からオンラインで配信する山口大学での授業運営も円滑に進んでおり、本学教員の授業は山口大学生の評判が高いです。現在、国に提出する昨年度の事業実施状況報告作成の作業に追われています。

こうした中、5月27日（火）にKDDI維新ホールにおいて3大学でキックオフシンポジウムを開催し、今回のニューズレターでその概要を紹介いたしました。本学の卒業生と在学学生もパネルディスカッションに登壇し、堂々と自分の意見を述べていたことに他大学から賞賛されていました。当日聴講できなかった方にはシンポジウムの様子をSPARC事業のウェブサイトアップしますので、是非ご覧いただければと思います。この共同シンポジウムに加えて、本学独自のシンポジウム/セミナーを秋以降に開催する予定です。取り上げて欲しいテーマなどがありましたらSPARC推進室までご連絡ください。